

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十五年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三七八号）

次

宗教最高の理想とその人生観…………近角常観：(1)

晩年の親鸞聖人…………福島政雄：(6)

◎御一代記聞書抄（続・一四）…………井上善右衛門：(12)

自照日誌抄…………西元字助：(15)

目

念佛詩抄…………木村無相：(18)

釈加仏の徳音…………花田正夫：(21)

慈光

第三十二卷 第十二号

宗教最高の理想と、その人生觀

近角常観

菩提樹下の曉、釈尊がはじめて涅槃（さとり）を得たま
いし時、明星は燐として東天に輝けり。又沙羅双樹の下、
釈尊がとこしえに涅槃の雲に隠れたまゝいしの後、夕陽は西
に傾きて、靈鷲山頭に覺目明らかなり、同じくこれ涅槃の
靈境なるに、何ぞその趣きを異にするの甚しきや。

吾人が現世の見地に立ちて、これらの靈境に対する感想
を披瀝せんか。前者の希望を以て満たされたる、後者の悲
哀を以て沈めるに似ず。見よ世尊成道の日、天樂空に響き、
妙華紛々たり、旗幟四方にひるがえり、盲者は明を得、
聾者は聴を聞き、諸天は讚美歌を奏す。これに反して、
世尊の滅を示したまゝいしの時、天地暗澹として、山動き、
地震い、樹枯れ、花しほみ、人天号泣して河水また流を止む。
况んや我等如來の遺弟たるもの、親しく無明長夜の法灯を
仰ぎ奉るに由なし、悲泣何ぞたえむ。

然れども比の如きは、これ現世の衆生の見地より仰ぎ奉
るの言のみ。もし夫れ如來涅槃の靈境よりこれを見たまわ
此

んか、何ぞ知らん、前者はなお有余の涅槃のみ。後者にい
たりては、まことにこれ無余の涅槃、真解脱の靈境なり。
けだしこれ宗教崇高の理想、諸仏如來の還帰したまゝいし所
にして、また諸仏如來の來生したまゝの妙境界なり。

想い見る、釈尊入滅したまゝ時、中夜寂然として声なく
おもむろに阿難を観みて、大涅槃を説きて曰く、如來は
常住にして^{阿難}変易することなしと。ああこれ吾人が最高の理
想、宗教の極所なるもの、八万四千の門戸、この堂奥に到
りて、初めて頂点に達したりと申すべしか。

極樂淨土は實にこの無為涅槃界なり。吾人仏陀の慈光に
接して、攝取の聖懷に抱かるる者、この穢土の肉身を捨て
たるの時、はじめて達し得べき崇高の靈境なり。宗教最後
の理想、ここに至りて初めて実現し得たりと申すべしか。
吾人は白状す。吾人は極樂淨土の靈境を聞くこと久し、然
れどもなお現世の光明中の生活に重きを置きて、死後の樂
土を欣求するの念のとぼしかりき。今にしてこれを想う、

まことにこれ浅薄なる信念、沈痛深遠の趣きを備えず、云
うことを行ふ。極樂淨土の思想は、厭世的氣風を鼓吹す
るのをおそれありと。

宗教はもとより現世の生活に便宜なる慰藉を目的とする

のみにあらざるなり。けだし宗教の理想は、この穢土を厭

離し、かの淨土を欣求するに至りて、眞の極所に達する者
かの涅槃の靈境をこの現世に求め得べからずと断定して
未來淨土に至りてのみ実現し得べしと確信する者、けだ
し宗教の最も高妙なる至極を顯現すといつづべきなり、古
聖歎じて曰く、戒行慧解ともになしといえども、弥陀の願
船に乗じて、先死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるも
のならば、煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覺月すみやかに
あらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆
生を利益せんときこそ、さとりにては俟えと

吾人はこの肉の穢身をもち、この如き煩惱の心を有する
以上は、徹頭徹尾眞実の涅槃の靈境をうかがうことは不可
能である。けだし吾人の胸中に宿りたまえる大信心は、直
ちにこれ仮性にして、仮性またこれ如來なりといえども、
なおこの肉身に寓し、煩惱の雲に覆われる以上は、決して
理想の境に達せるものと云つべからず。何人か厚顔、即身
成仏、即心是仏を公言し得るものぞ。すでに肉の身を有す
すでに人の心を有す、食を仰がざるべからず。欲おこら

ざるべからず。誰かまた敢て煩惱即菩提、生死即涅槃を絶
叫する者ぞ。菩提の花は煩惱の風雨に犯され、涅槃の月ま
た生死の雲におおわる。古聖賢の自力の為すなきを歎する
まことに故あるかな。

ああかくの如き不完全の人生、かくの如き五十年の浮生
吾人汲々として勉むるも、また如何程の事を為し得ん。
唯仏力をたのみて、その牽^ひく所にまかすにあらずんば、ま
た如何ともすべからず。すでに絶対に自己の無能力を自覺
す、あに全然運命を仏力にゆだねざるべけんや。すでに吾
人自ら救う能わず、何ぞまた人を救うの能力あらん。唯信
仰の上より、かの仏陀の慈悲を伝えて、共に如來の御弟子
として、同朋同行たらんのみ、何ぞ人に對して慈悲を行ふ
力ありと言わんや。もし少しく慈悲を行ひたりと仮定せよ
僅かなる人生においていささかなる事を行う。何ぞあえ
て臆面もなくこれを慈悲と称することを得ん。理想の慈悲
は未來淨土に達したる後にあり、現実の不完全を知ること
の深きは、理想を眺むることすこぶる崇高なればなり。自
力の無能を知るは、他力の力強きを悟れるなり。今生にお
いて達し得べからざることは、全く來世において満足せし
めたもうなり。古聖賢、その所信を告白して曰く、
“淨土の慈悲というは、念佛していそぎ仏になりて、大慈

大悲心をもて、おもつがごとく衆生を利益するというべきなり。今生いかにいとおし、不便とおもつとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛もすのみぞえとおりたる大慈悲心にて候うべき”と。云う勿れ、自己を見ること卑うして小なりと。自ら見る卑きものは、必ず高遠なるものを仰望して止まざるなり。自ら評価するの小なるものは、必ず偉大なる真価を抱けるものに外ならざるなり。暗澹たる人生、前途星光の輝くあり、あに無明の長途に疲れんや。吾人が此世において行い得るの行為に満足するが如きは、未だ向上的態度真剣なりと云うべからざるなり。征人首をめぐらして来れるの遠きを誇る時は、すでに佇立して、歩行を怠るの時なりき。自己の罪惡の深きを自覺するものは、自己の罪惡を告白するの勇気を有す。現世の価値を悟了するものは、現世に避け得べからざる欠点を粉飾するの醜を為さんや。人間は飽まで人間なり、外に賢善精進の相を現することを得ざれ、内に虚偽をいだけばなり。つらつら煩惱の無尽藏なるを驚くの時は、如何に仏陀の光明の無限なるかを歎する所以なり。人間の価値はかくの如きものなりと悟了する時は、仏陀の世界が如何に広廓たるかを観ずるの時なりけり。雲間にもれ出する月影の如何に清らかにして且つ明らかなるや。然れども、吾人が万星青碧、一片の雲をとどめざる法性

樂界中に往生して、真如法性の身を証せば、此の如き曠劫輪転の結句に到着する者、吾人死をたのしむべきはずにして、所謂苦惱の旧星に纏綿たる所以のもの、あにその理なからむや。

吾人は此の如く生死海に流転せり、此の如く無明の中に彷徨せり。而して今や幸に、此の如く無明長夜の灯炬に遇い奉り、生死大海の船筏に乗ずることを得たり。實にこれ盲龜の浮木に逢えるが如し。聖人深く感泣して曰く、噫弘誓の強縁は多生にも遇い難く、真実の行信は億劫にも得難し、たまたま行信を得ば遠く宿縁を慶べと。吾人また同歎、同喜、感謝の涙に堪えざらむや。あだかもこれ百川の相集りて大海に朝宗するが如く、吾人何等の幸か、相ひきいて不可思議の願海に帰入するを得たり。四河海に入りて同一の酸味たり、何ぞその清と濁とを問わむ。水清きがために海水の清を加えず、又水濁れるがために大海のこれを辞するを聽かざるなり。本願を信ぜんには、他の善也要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、惡をもおそるべからず、本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえに。かつまた吾人の称して善とするもの、果して絶対の善なるか。また惡と称するもの、真に罪悪たるや否やを知るべからず。聖人の仰せには、善惡の二つ、総じても存知せざるなり。聖人の故は如來の御心に善しと思召す程に知り通いたらばこ

の覚月を眺めんと欲せば、吾人は飽くまで煩惱の黒雲を払わざるべからず。飽まで煩惱の業繫を脱せんと欲せば、全然肉の穢身を脱せざるべからず。吾人が真解脱の境を死後の樂土に求むる者、まことに故あるかな。なお而して死の関門の来るをよろこばず、何ぞその撞着の甚だしき。けだし煩惱の繫縛すること無窮というべきかな。

首をめぐらして吾人の過去を顧るに、曠劫以来輪廻転生して環の端なきが如し、今生の父母妻子、現在の師弟朋友いずれの世よりして因縁を結び来りたる結果なるや知るべからず。一点の怨は展転して後生の大惡をかもし、一片の恩愛は永劫の執着を招く。釈尊しばしば法を説くに、遠く過去の本生譚を語りて、善惡の所作必ずその由て来ること深きを示し、吾人の生死海に沈溺することの長きをさせとしまう。吾人善を行ふ、自らおもえらく、我善をなし得たりと。何ぞ知らんこれ為すべきの原因ありて然るものたるを。また吾人惡を為す、過去の宿業、避けむと欲して避くべからざるものありしを。先哲曰く、卯毛、羊毛のさきにいる塵ばかりも、造る罪の宿業に非ずといふことなしと。ああ何ぞその由て來ることの遠くして、かつ久しきや。一樹の蔭、一河の流、皆これ過去永劫の昔より、生々世々の芳契にあらざるはなし。而して今や吾人、無為涅槃の極

そ善さを知りたるにてあらめ、如來の惡しと思召すほどに知り通したらばこそ、惡しさを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、唯念佛のみぞまことにておわしますとこそ仰せは候いしか。噫、虛偽の世界なり、罪惡の世界なり、吾人の眼中唯念佛無碍の一一道あるのみ。華嚴經に曰く、十方無碍人一道より生死を出でたまえり、一道とは一無碍道なり、生死すなわち涅槃と知るなりと。涅槃經に曰く、大信心は仮性なり、仮性はすなわち如來なりと。嗚呼念佛無碍の一一道は、生死海を一転して極樂無為涅槃界に導きたまうなり、他力信心の仮性は、吾人罪惡の凡夫を開発して、如來慈父の膝下に往生せしめたまうなり。吾人称して往生という、然れどもこれ所謂無生の生なるもの、曉鐘ひとたび響いて長夜の宿夢忽ち破れ、千古醒覚の靈境に遊ぶが如けんのみ。まことにこれ宗教の極致、人生最高の理想なり。

経にこの境を描きて曰く、顔容端正にして世に越えて希有なり、容色微妙にして、天に非ず、人に非ず、皆自然虚無の身、無極の体を受くと、何ぞ莊嚴清浄にして和樂高潔なる。吾人の慈親もこの中に在せり、吾人の恩師もその境に入りたまえり。兄弟姉妹、妻子朋友、永劫の間、相親し、相愛せし者、俱に一處に会して、修行安心の居宅に住

鳴呼 教行信証 真宗存す

思想険惡 何ぞ論ずるに足らん

歎異一篇 後昆に伝う

し、愛樂法味の屋寓より還りて、再び生死の園、煩惱の林に遊戯し、始めて理想的救済の大慈悲を実現することを得べきなり。嗚呼現世かくの如く想像するだも、猶これ夢中の現象ならくのみ。こい願わくばとこえに如來大覺の招喚を仰ぎて、臨終一念の夕、法性の覺月すみやかに現われて尽十方無碍の光明に一味たるの時、大般涅槃の真実の証に入らんかな。

× × × ×

大般涅槃の真実の証は、吾人最高の理想、宗教の最後たると同時に、宗教の最初なり。本師法王の如来もこの境より来りたまえり、釈尊もこの境より示現したまえり。有縁の知識もこの境より化したまえり、十方の菩薩もこの境より現われたまえり、有縁の知識も、同行の親友もここより来りたまえり、これに至りて人生なるものは、皆吾人をして涅槃大覺の本城に還らしむる一大行路たらざるはなし。これにおいてや彼の穢れたる者、何ぞ知らん、この清淨を莊嚴する所以にして、彼の悪しきもの、かえつて善を顕現する所以なるを知らざる。この如く涅槃真証の靈境より反射し来る光明は、吾人人生をして、善化し、美化し、靈化しつくさずんばやまざらんとす。噫、言語ここに絶えて吾人は淵默讚仰申すの外なし。（慈光錄より）

阿闍世王の為めに

○

不入涅槃の章

善巧大悲の涙

矜哀無尽藏なり

晩年 の 親鸞聖人

福 島 政 雄

「晩年の親鸞聖人」そういう題にいたしました。親鸞聖人のことを、少しばかり申上げてみたいと思うのであります。ところが聖人に親しんでおいでになる方々には、ちつとも珍らしくないお話であります。ただ私自身としての感じが、少しございますからそういうところを聞いて頂いて、またいろいろな御意見がありましたら、後で伺いたいと思います。

実は数年前から京都の方で晩年の聖人というのを書いてくれないか、というようなお頼みを受けておりました。ところが、なかなか書けませんでした。今年の夏になりましたが、毎日のように、少しづつペンをとりまして、晩年の聖人を描き出して見ましたのであります。それを思い起しながら、お話を申します。

晩年の聖人と申しますと、ご存じの通りに、聖人の御一生は九十年でありますからして、三十年ずつに分けて考えます。三十歳一二十九歳でありますか、法然上人の弟子におなりになりましたあの頃、それから六十歳、六十年をおこし越えておいでになつた頃であります。関東から京都にお移りになつたその時を一区切りといたしますと、まあ大体三十年ずつ位に、聖人の御一生を三段に分けて考えますことが出来ますので、晩年と申しますと、六十歳以後の聖人、こういうつもりであります。

六十歳以後の聖人について、御存じの通りに、聖人のお心持を伺う材料は相当にある。というのは、聖人のお書き残しになりましたものが、大抵六十歳以後の御撰述でありますから、もつとも「教行信証」は五十二歳で、関東で御まとめになつたというのでありますですが、御存じの通り、この頃研究を進めておいでになりますその道の専門の方のお説を伺いますというと、これも矢張り京都にお帰りになつ

でから後にまとまつたものに違ひない、ということになつております。

そいたしますと、「教行信証」をはじめ沢山の御撰述、御述作、それがほとんどみんな六十歳以後におまとめになつたものであり、お書きになつたものである、こういうことになります。それだから、晩年の聖人の御心持を伺い申上げる資料が豊富にあるわけであります。ところが私共が晩年の聖人の御心持にどれだけ入り得るか、こういう問題になりますと、なかなかのことでありまして、私なんかもうすぐ七十歳になるのでありますけれども、晩年の聖人の御心持の、どこまでが分つてあるのか、これは問題であります。これを申上げますから、御批判頂きたいのであります。

二、善鸞のこと

関東からどうして京都にお帰りになつたか、それが問題にされております。いろいろな方が、いろいろな説をお述べになつております。その中で、これは皆様どうお考えになるか知りませんが、そこには聖人の家庭問題が余程関係があるだろうと、こういうことに考えていられる方が多々あるようであります。

というのは、聖人の一番上のお子さまです善鸞、あの方の問題が大きく取扱われておるのであります。この

方は聖人の御子であります、どなたの腹にお生れになつたか、これが問題にされるところであります。普通の系図では、やはり惠信尼のお子であるとなつていますけれども、どうもそこに疑問がある。それは一生親鸞聖人伝の研究を続け、それに一生を捧げて、五十幾つかでお隠れになりました山田文昭という方の書き残されました「親鸞聖人伝の研究」を読みましても、矢張りそこに疑問を出しておいでになるのであります。

善鸞という方は、惠信尼のお腹にお生れになつたのじやないだらうか、惠信尼とは継子、継母の関係であろう、か。こういう疑問が出ているのであります。聖人は法然上人の門に入られて後に、京都時代に御結婚になつたお相手であるか、どうもなんとも分りませんが、玉日姫というのじやないでしよう。誰か分りませんが御結婚せられた、その時の御子が善鸞という方であります。そのお母さんは早くお亡くなりになつたと思われる。その後聖人が越後に流され五ヶ年、その間に改めて越後で惠信尼とご結婚になつた、こう考えるのであります。そして関東にお移りになります。そしてから、京都でどちらかに預けておいでになつたところの善鸞をお膝元にお寄せになつた。このように考えますのであります。

ところが惠信尼のお手紙をお読みになつた方は、お感じ

になるでしようが、このお方は非常に立派な方だと、私なんかもお手紙を読んで感じますのであります。人柄としても、また信仰の上においても、立派な方であつたと思います。そうでありますけれども、この継子、継母という関係は、非常に悲しい関係、恐らくこの善鸞、あの方から継母である惠信尼に対し、ひがみ心をだんだん持つようにお成りになつたのであります。こういうことが考えられますのであります。

と申しますのは、人間といううちでも、殊に男の子であります。男の子は幼少の時代は別といたしまして、青年時代になりますと、非常に鮮やかに新しい心持が起つて参ります。それは秩尊なんかもそうでいらせられたに違ないと思つてあります。秩尊がお生れになつてから直ぐに御母君がお亡くなりになりましたが、やはり十八、九歳、二十の青年時代になりますと、生みの母親を非常に慕い求められるというような御心持が新たに湧いて来たに違ひない。そういうのが、秩尊が須弥山の上にお登りになつてお母君のために九十日間とか御教をお説きになつた。あつい形で現在は伝えられますが、それは青年時代に入つてから、生みの御母君を非常に慕い求められたという、それがああゆう経典の形となつて残つてゐる。このように感ぜられますのであります。

とにかく私ども男といふものは、青年時代になりますと、非常に心持が変つて参ります。善鸞という方も、関東に引取られて、だんだんと成長なさる。青年時代以後になつてから、生みの母君を慕われるといれた、非常に亡くなられた、生みの母君を慕われるといつてくる。生母を慕つ心は、次ぎの母を離てる、こういう心になるのであります。これは悲しい人生の事実であります。実際そういうことであると思うのであります。そうなると、惠信尼が立派な方であつても、一方がひがんで見ますから、両方の間に心持が通じなくなる。そこに何とも云えない悲しい問題が、聖人の御家庭に続くようになつた。

こういうようと考えて参りますと、恐らく聖人はこの問題が、どうにもならなくなつた。そうして聖人は御家庭を解散なさる。それは人間としては普通のことじやないわけでありまして、六十を越えて、老年期になつてから、夫婦別々に住むというようなことは、人生の最も悲痛なことであります。どうしても聖人としては、そうしてこの問題の解決を求めなければならんという心持じやなかろうか、こう私一人がそんなことを考えているのじやありません。つい四年前でありますましたが、宮崎県の方に参りました、皆さん方御存じかも知れませんが、権藤正行という老僧が、

正像末和讃諷誦というのをお出しになつておられます。この方に直ちにお目にかかりました時に、聖人の御伝記関係のことを、いろいろお話して下さいましたのであります。が、そのお話の中に、こういうことが出て参りましたのであります。そう云われてみますと、成程そう考えるというと、少しばかり聖人が六十越えてから、別々にお住いにつたという心持が分るというようになりました。これは例の聖人の御手紙の中にも、繼母云々といふよな、善鸞の御言葉としていわれてあります。のことなども思い合わせて、どうもそうじやなかろうか、という風に感じますのであります。

お帰りになつたというのは、この問題が一つ。もう一つは聖人という方は、教団を作つて勢力を張るというようなことを、微塵もお考えにならなかつた。それをお避けでおいでになつたということが感ぜられるのであります。ところが関東に二十年もおいでになる間には、だんだんと聖人の御信仰のお集りと申しますか、聖人によつてお念佛の心持を聞かれた人々が、だんだんと長い間には沢山になつてくる。そうなると、自然に聖人を戴いて一種の教団を作るといふような気配が出てくる。このことを聖人は非常に深くお考えになつたのじやなかろうかと思ひます。というのは聖人

いうことの上に、大変力があつたということはあるのであります。なんとも云えない苦しみの中に生活しておいでになつた、人にはいゝべき問題ではないけれども、この家庭の問題にドン底まで苦しみ、こういう御体験を聖人はなされたに違ひない。しかし、そのため聖人の信仰上の心持は、いよいよ深くなつてまいりました。そうして、いまのようなことで、京都にお帰りになつた。こう考えますのであります。

三、晩年の聖人

それじや京都にお帰になつてからの聖人はどうかと申しますと、ほとんど三十年近い歳月を、いろいろな著述をなされるのにすごしておいでになります。これはどうも不思議なようなことであります、関東時代には次ぎ次ぎにお弟子が増えておりまして、京都にお帰りになつてから、ほとんど新しいお弟子は出来ていません、というようなことは何事を物語るかと申しますと、これは聖人がすっかり世間からは隠れた生活に入りになつて、ただ一筋に本願の旨を中心とするところの御述作におふけりになつた、こういうことを物語るものと思ひますのであります。

ところでまたここで一つ私としての聖人についての感想であります、一体人間の脳髄というものは、どんなものであるか。老年になつてくると、だんだん働きが鈍くなつ

のお若い二十歳を越えられましてから、越後に流される間に、仏教の教団の争いということを、いやというほど見せつけられておいでになるのであります。比叡山とか、三井寺とか、南都奈良の方のお寺とか、そういう間に始終争いがあつた。いわゆる教団の争いがあつた。いやしくもこの真実の仏教に徹したものが、そういう争いをすべきはずのものじやない、これは聖人が非常に深く心に滲みてお感じになつていたと思つのであります。そうですから、関東でどうやら自分を担ぎ上げて、お念佛の教団というものができそくな気配がある。これはいけないとということを、心から御思ひになつたであろうと思ひます。それがまた聖人が関東を振りすぎて京都にお帰りになるようになつた一つの原因になつてゐるのじやなかろうかと思ひます。

もう一つは、京都で大分不仕合せな目に合つておいでになりますところの、末のお子さまであります覺信尼、あの方の問題があります。それですから、京都に帰つて、この覺信尼のことを、なんとかしなければならん、これが一つこういうふうな三つ位が、聖人が関東から京都にお帰りになるところの、動機になつてゐるのじやなかろうか、こういふことを思はせられますのであります。

もつとも聖人としては、その御家庭の、なんともいえない悲痛な問題というのが、聖人御自身の信仰が深まるると

てくる。或る程度までくると、老耄状態になるものであります。私が若い時、アメリカの心理学者の本を読んだ、その記憶によりますと、著通の人間は、五十五歳頃から頭がそろそろ駄目になり始めるそうです。優れた人でありますと六十五歳から頭がそろそろ駄目になり始める、こういうことをその書物から記憶しております。次に私が三十年も前に教えたような関係になつていえますけれども、今では人間の脳髄の解剖学専門、そういう学者になつています鈴木君に聞いてみましたが、人間の脳髄についてこういうことを聞いたがどんなものでしよう、と聞きました。同じ君は、成程そういうものだけれども、それで失望しちゃいけません。人間の脳髄は適度にそれを使つていくと、老年までずっと進歩を続けるものです。例えばドイツの文豪ゲーテ、ああいう人は老年になつて脳のヒダが一つ増えたと云うように云われた。それだから決して失望せず、ただ適当に使つていくことが必要であります。

こういうことを聞きました、改めて聖人のことを考えますと、聖人は六十歳以後、「教行信証」一つだけでも大したものであります。それからずっと八十何歳、九十歳近くまで、いろいろなものを書き残しておいでになる。この聖人の脳髄というものは並大抵のものじない。これはなかなか優れた脳の働きを持つておいでになつたということ

もありましょう。一方においては、晩年になつてから、信仰の上で深く落着いておいでになりまして、そのために適当に頭を使つておいでになつたに違ひない、こういうことを考えさせられますのであります。

今頃大学教授は六十歳、せいぜい六十五歳が停年ということになつておりますが、聖人の場合は、そういう停年ということはないのです。そしてあんなに著述を残していらっしゃる、その中心問題はどこにあるのかということになりますが、実は私自身はこの仏法の宗学者の研究のよくなことをする力もありませんし、又歴史の学者の方で細かな研究をなさる、そんな力もありませんから「教行信証」なんかも、ただ要点々々をよく味わせられているだけであります。非常にむつかしい、細かな問題は私には分りませんのであります。私が「教行信証」に親しみはじめたのも、近角常觀先生に、信仰上の非常に熱のある話を、信の巻の、例の何闇世王の入信の文というところを講題にして、一週間ばかり続きのお話を聞きました、というような事から始まつたのであります。どうも信の巻というものが非常に親しいのであります。「悲しき哉、愚禿蠻、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し云々」というあのお言葉なんかが、最初に私の心に深くしみ込みました。

そして何闇世王のことなんかが、第一印象として私に感

御一代記聞書抄（続・一四）

井 上 善右衛門

思案の頂上と申すべきは弥陀如来の五劫思惟の本願に過ぎたることはなし。此の御思案の道理に同心せば仏になるべし、同心とて別になし、機法一体の道理なりと。（第二四二条）

人間の思考を一般に思案といいます。そしてその思案によつて何事をも解決してゆこうとするのですが、この人生というものが人間の思案で解決し尽くせるでありますか。先づ私どもは人生の問題と人生そのものの問題とを区別してみる必要があります。

前者の人生の問題は、人生の上に起り来る諸問題の処理でありまして、これにはある程度、人間の思案が役立つのです。例えば経済の事柄や、生活設計、政治や社会に関する諸問題です。しかし人生の問題でも、人間関係となると熟慮思案だけでそう簡単に処理し尽くせるものではありません。

銘を与えたのであります。だから信の巻から入りはじめたといつていよいのであります。それから二十何年経ちました頃、私自身が五十歳を越えました頃から、今度は行の巻のお言葉が少し感ぜられるようになりましたのは、「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず」

あのあたりの言葉であります。あの言葉は、明るい世界を開いております。私の場合には五十歳を越えてから少しくなりますと、未だに私には分つてはいない、と申すのが本当でありますけれども、大無量寿經を中心にお書きになつておる行の巻は、私自身が五十歳を越えてから、この経の上巻に大分親しむようになりますから、私の心にしみるようになつて参りました。

未完



て生きるということは、土台のない家に住んでいるようなものです。それが自己を大切にする生き方と言いましょうか。

人間の思考や論理は究極の真実に手のとどくものではありません。人生そのものの問題を照して真の解決を与えるものは究極の真実そのもの外にはないのです。人間の思考は如何に微細にこれを運んでも有無の思念を超えることは出来ません。それは人間の思考そのものが有無の分別の上に成り立っているからです。この分別を超ねば仏の真実に出遭うことはできません。正信偈に龍樹菩薩を讃じて「悉く能く有無の見を摧破して、大乗無上の法を宣説したまう」とあるのは、その意を誦されたものです。

二

最近特に勝鬘經の如来藏の真実に私は心うたれています。聖徳太子が大乗仏典として最初に研鑽され講説されたのはこの勝鬘經です。その經の根本精神は如來藏にあります。如來藏とは煩惱につつまれた如來という意ですが、若しこれを人間の思考をもつてするならば、煩惱の中に如來が隠れているということは、凡夫の我々が真如法性の真実を所有していると解されます。涅槃經の「一切衆生悉有仮性」という句はそれを一層鮮明に語つたものと理解され、我々の中に仮性が存するという思いを持つにいたります。

ところが勝鬘經には決してそのような如來藏が語られてゐるではありません。我々が所有するとか、我々の中に有るとかいう思いこそ人間的有無の思考の産物であります。勝鬘經には煩惱に離れたまわぬ如來が明かされているのです。經には自性清浄の法身を説き「是の如きの如來の法身は煩惱藏に離れざるを如來藏と名づく」（法身章）と説き、「如來藏とは是れ如來の境界なり、一切声聞緣覚の所知に非ず……思量の境界に非ず」（如來藏章）と述べられています。太子の義疏には、如來藏の藏というは隠の状態の意であるが、ただそれだけでは領解しがたいであろうから、顯の状態の法身を合せ説いて如來藏の真実を信じるように勧められているのであると申され、また如來藏と法身とは一應、隠と顯との別があるが、決して異体なのではなく互に相即するのであるとも承認されています。即ち如來藏を離れて法身もなく法身を離れて如來藏もないのです。そうなると煩惱と不離なる法身、即ち如來藏こそが、如來の如來たる所以ということになります、まさに池山先生が「われならぬ清らのわれのわれにありて」と申されたことと一つであります。藤秀穂先生の「いろは歌」に「蝶々と花 衆生と仏 離れられないわけがある」と詠われているのが何とも有難くいただかれます。

この如來藏の真実を如來藏智といわれてますが、阿弥

陀仏の五劫思惟の本願はまさしくこの如來藏智において思惟成就された攝取の真実道であり、人間的思量の及ぶ境界ではないのです。この如來藏智によらなければ、人生そのものの究極の問題は決して解決されません。人間的思量では何とも解決できぬ問題を解決して下さる本願の真実を仰いで、本条には「思案の頂上と申すべきは、弥陀如來の五劫思惟の本願に過ぎたることなし」と語られております。

三

「この御思案の道理に同心せば仏になるべし」とあるその同心とは信心に外なりません。五劫思惟の本願に心開かれ、仏智をただ有難く頂戴することです。勝鬘經には「信心に依つて法智に隨順す」（自性清淨章）という言葉が輝いています。そして「如來に調伏せられて如來に帰依したてまつる、法の津沢を得て信樂の心を生ず」（一乘章）と語られているのは、その所以を示された明文です。信は澄淨なる眞実心が衆生心中に徹到し映発する出来事でありますから、信は即ち隨順法智であり、そのまま「如來よりたわりたる信心なり」であります。

先の同心を承けて「同心とて別になし、機法一体の道理なり」と結ばれているのでありますが、機法一体ということは人間の思考する理念的一体觀に止まるべきではないと

思います。親鸞聖人は機法一体という言葉は用いられませんでしたが、覺如上人以来、宗義を深く味う言葉として重んじられるようになり、特に蓮如上人は安心決定鈔を愛読され機法一体の法味を宣揚されました。

既に述べるように人間の思案思考は如來の真実に到達する道ではありません。また我々の救われる所以でもないのです。従つて機（衆生）法（如來）一体ということは如來の方に成就された南無阿彌陀仏の六字の中にこそあるべきで、それを我々の思考に移せば觀念の影となります。我々にあつて機法一体とは、二種深信の中にこそ味わわるべき眞実です。だから今もまた同心といわれていてる信心について機法一体が述べられています。如來と衆生の關係は不一不異です。如來藏の説示にもよくその趣きが示されていました。不一不異にして不即不離ということは人間的思考の本質には收め尽くせません。それをさながらに頂戴出来るのはただ眞実信においてのみであります。機法一体ということはまことに尽きぬ深意を宿す言葉ですが、それはどこどこまでも信の體験を離れることなく法味愛樂すべき貴い言葉だと思います。

自照日誌抄（28）

西元宗助

一

十月十五日（水）、福井県庁での同和問題についての講話をすませ、その帰途、武生駅に下車して、無相さんをお訪ねする。駅でタクシーに乗り、「老人ホームの和上苑まで」といえば、運転手さん、武生市郊外の目ざす和上苑に運んでくださる。約十五分の距離。暖い小春日和であった。

受付に、訪問の旨を通じると、快よく案内してくださる。すこぶる感じがよい。ここは真宗十派の一つの出雲路豪攝寺（所属寺は六十余）の經營とのこと。まことに小さい教団でおありながら、よくもこんな立派な社会福祉施設を、しかも無相翁の面倒をよくみていただけてと、ひそかに敬意を表する。

さて無相さんは、和上苑の特別室一八畳の間に鎮座まして、法岡龍夫氏と応答の最中であった。法岡氏は富山教務所の駐在で、先年お招きいただいた能登の清琳寺さんの副住職でもおありで、まことに法義にあつい方。承れば

毎月一度は無相さんの法談を聴聞に参上なさること。
それで私ども夫婦、躊躇していると、無相さん、私どもの思いがけない訪問に嬉しそうに、さあ、さあ、早くお座り下さいとのこと、法岡さんはさつそくお茶の用意に座をお立ちになる。

あらたまつて無相さんと相対すると、じつに仏像を仰ぐが如くで、香氣部屋に充ち、お念佛が朗々と自然にお口から流れでおられて、なんともいえぬ法樂のひとときでありました。なるほど無相さんは、目は半盲になられた。耳も補聴器を二つ用いて漸く聞こえるという難聴になられた。しかし、そのお顔、なんと美しくさわやかであります。俗物のこちらがチト恥ずかしくなりました。

あまりお邪魔してもと、辞去しようとすると、自分の部屋を見てくださいと、無相さん、杖をついて案内してください。承ると、昨夏まで六ヶ年間、無相さんのおられた太

子園は普通の老人ホームで、その太子園に隣接したこの和上苑は「寝たきり」の重症者老人ホームのこと。そういう無相さんは高血圧に心臓病。狭心症発作で時折、危機に直面してこられたのである。

ここは収容定員五十名、毎月平均一名づつ死去していくこと。なるほど、どの部屋もベットに寝たつきりの無言のご老人、病人ばかりで、無相さんの部屋（病室）も、四台のベットが並べられてあって、それぞれご老人が寝ていられる。その一つのベットが無相さんのであつた。

無相さん曰く、ここが私のついの住み家。ただ今日のようにご来客あれば、同室の皆さんに迷惑だし、それに大きな声も出せないので、苑長さんの格別のご好意で、あの特別室にでかけていきますと。

○

帰宅して二、三日すると、無相さんから用紙十二枚の長いお手紙が届く。しかも私の訪問した翌朝の未明四時誌すとある。その御文字の素晴らしくおありのこと。そしてその封書の裏に、更に左の追つて書きが朱書されであった。

「会いたいお方は、会わねばならぬお方は、向うから、ここまで来て下さる。これはまことにありがたいことでござります。ナム、ナム、」

二

たしか昭和二十五年のことであつたかと思う。シベリアから帰えて間もないころの私を招いてくださった奈良の淨教寺さんで、その淨教寺のおばあさんから、戦死された方の遺品の手帖に書きしるしてあつたという俳句をお見せいただいた。それは、
救われぬ身にしみわたるみ名の声
　　という句。この句は、爾來、わたしの身に深く響き、わが身にも沁みとおるものとなつた。それだけに、この句を作られた方の御生前のおん名を知りたいと切に想うようになつた。しかし淨教寺のお婆さまのお話では、なんでも龍大ご卒業の方でお寺さんでおありの筈ということだけで、もう一つはつきりせず、その中に、この篤信のお婆さんもこの世を去られてしまい、それだけに心残りがしてならないかつた。ところがこのたび、はからずも村上速水先生のお報せによつて、すべてが明かになつた。それは先生のご同窓の故會我是精氏（昭和三八年死去）の著書『歎異抄に生きる人々』（永田文昌堂刊）の中の「光と影」の一節に「私が京都の学校におりますとき、少し上のクラスの人に山田さんという方がおられました。マレー作戦で戦死されたということですが、遺品の手帖の中に書かれてあつた」として右の句の紹介されてあるのを、村上先生はコピーして、送つてくださつたのである。しかもその後、先生がさらに

龍谷大学文学部事務室を通じて調べて下さったところによると、その方の姓名は、山田真龍。本籍は広島県高田郡郷之村大字桂。大正元年九月一日生。昭和十七年四月十八日戦死、とのことである。なお山田さんは在家出身の由、平素から俳句をたしなみ、村上先生もそのお顔に記憶がありになるとのことであつた。長いあいだ、探し求めていた方の御名を知りえて、嬉しきこと限りなし。

三

十月二十六日（日）産業大学理学部の黒田直樹先生運転のクルマに、大谷大学の大屋憲一先生と私ども夫婦、お乗せいただいて、洛西・淨住寺での一道会に参加する。淨住寺の山門を入ったところの、樹々に包まれた石段のあたりから御本堂にかけては、寂々としてすがすがしく、京都でも数すくない、風景である。わたしども、心洗われ、身清められる、思いをいたしつつ、表玄関にて靴をぬぐ。参会者は満堂の百名余。既に御住職徳草老師をお導師とする阿弥陀経の説誦は始まりかけていた。この日のことはいずれ、徳草老師の麗筆によつて誌上に紹介されることであるので省略させていただくが、徳草老師の歎異抄拌誦も、池山榮吉先生を偲ぶ花田先生の御法話も、例年にもましていよいよ有難くあつた。また井上善右衛門様お話によつて大分の安部克巳さんがついに御往生になられたということ、

はからずも広島の藤秀翠先生から、御新著『二河白道と人間』（京都・百華苑刊・定価千三百円）を賜わつて、いたく恐縮いたしました。先生の宝寿まさに九十五才。しかしまだ背骨をシャンと立てられて禪僧のごとくにもあられる。右の御高著は書題のことく、善導大師の二河譬を中心にして人生をつらぬく大信心を明かにされたもので、文章は雅味があつて平易。まことに信味豊かな書であるので、披露させていただく。なお序でに、厚かましい乍ら、再刊した拙著も。それは『ソビエトの眞実』と題する俘虜記。（東京杉並区西荻南一丁目・教育新潮社・千六百円）

ことしもいよいよ終りが近づきました。省みて、本年も亦皆様から、格別の、無言の、ご教化をいただきました。新しい年も、何分にも宜しくお願ひ申しあげます。

（十月二十九日、記）

念佛詩抄

あ あ 仏 法

香師＝香樹院徳龍師

香師おおせに
かかる不定の命をかかえ
生きのびて聞く仏法の
尊さを知らぬ——

地獄・極楽

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムカミダブツ

生きのびさせて
くださるも仏法
お聞かせ

くださるも仏法
お恩お知らせ
くださるも仏法

ああ
仏法 —

香師おおせに
地獄極楽といえ
死ぬる時にはじめて
地獄極楽が出てくるよ
うに
思えども
わが身の足の下が地獄なり
また極楽も
はなはだ近きなり——

木 村 無 相

木 村 無 相

地獄・極楽

香師おおせに

地獄極楽といえ
死ぬる時にはじめて
地獄極楽が出てくるよ
うに
思えども
わが身の足の下が地獄なり
また極楽も
はなはだ近きなり——

そしてその遺された歌を承つて、愛惜追慕の謝念をあらたにしたことありました。そのお歌は

いつの日かわれに来りてわれとなり

われを運びていかせたまえり

なお今春いただいた安部さんのお便りには、

まどひつつ またまどひつつ まどひつつ

み名に招（よ）ばれて淨きみ国へ

とありました。南無阿弥陀仏と合掌し奉る。

○

釈迦仏の徳音

花田正夫

十二月八日、釈尊の降魔成道の聖日を迎え、その徳音に親しく浴し、或は悲歎の海に救いの船筏を恵まれ、或は闇夜の道に光明の燈炬を与えられた人々を憶念申しながら、謹しんで誌す

朱利槃特

兄の摩訶槃陀迦は聰明であつたが、弟の朱利槃特は生来愚鈍であつた。兄が舍利仏目連に遭つてから仏弟子になつたので、兄に従つた。然し法文の一偈も暗誦することが出来ぬので、兄は「汝は實に愚中の愚、鈍中の極鈍である」と教呵した。

槃特は精舎の門外に立つて「噫、自分はもう仏法を学ぶことは出来ない、どうしたらよいであろう」と悲歎に沈んでいた。これを知られた釈尊が静かに歩み寄られて「槃特、泣くのをやめよ。愚人の愚と知るはむしろ正智である。愚人の智者と名告る者こそ、眞の愚者なれ」と慰籍され、「一本の簫を授けられて

「汝は精舎の内外を掃除しながら、塵を払わん、垢を除かん」と誦えよ」

と仰せられた。彼はこの簫を執つて二句を誦し続けたが日を重ねるにつれて彼の心は漸く熟し、垢とは何、塵とは何、これわが心の垢であり塵である、これをあわれまれての仏陀の御慈悲であつたと、気付き、遂に殻を破つた鳥のように自由の身となつた。

この時、兄が傍に来たが、つくづく弟の相好の立派さに心うたれて「汝はすでに証りを開いたのであるか?」と讃え、槃特は黙して、兄に謝している。

このことは教團の内外に非常な驚きを与えた。然し彼がもつ偉大な神通と、訥辯の雄辯は、仏弟子中特異な光彩を放つにいたつた。

病比丘と釈尊

仏弟子となつて道を求めたが、いまださとりを得られず苦しんでいた時、病になり、不淨を洩らす比丘があつた。

仏陀は、昔から死んだ者のない家から芥子粒を求めて來よ、命じられると、家から家へと、不死の家を求めて歩いたが、何處にもそうした家はなかつた。日は暮れ、脚も疲れきつた時、子は死なぬと思つていたが、間違つていたそれを知らそつたための仏の仰せであつたと気づき、急いで仏前に帰り、自分の愚かさを愧じつゝ、道に入った。

日本では泉式部が、

うつし世を仇にはかなき世と知れと

おしえてかえる子は知識なり
と、詠じたのは、これに似る実話である。

鬼子母の開眼

一人の母があつた、子が多く、性も極めて荒く、常に人の子を盗み殺して、その生き血を吸う、そのため子を亡うた母の悲泣の声が高く、盗む女を鬼子母と呼んだ。仏は阿難に命じ、鬼子母の留守中に、その子を奪い、精舎中に隠さしめらる。鬼子母は仏前に訪でて救いを求めた。仏はこれを迎え、汝は我が子を愛する心あるも、他人も同じ。と説かるや、初めてわが非を知り、大懺悔するを仏が見られて、その子をかえし、将来いつまでも、子を護る心眼がひらけた。

愛児を失つたキサーゴータミー女

死児のいまだぬくみのあるのを抱き、たすけを求めて街をさまようた。その時、誰云うとはなしに、仏陀をたずねよ、という声にひかれて、仏前に訪でた。

釈尊は、それを敬虔に聞きとられた。病比丘はその母親の子に対するような慈顔を仰いでいるうちに、釈尊が、病苦を憐れんで下さる大悲心に浴して、大いなる慶びを得て心眼がひらけた。

現在も鬼子母神と仰いで、子を持つ親があがめている。

肥汲み人夫尼提の得道

舍衛城に尼提と名く人があつた。極めて貧しく、いたりて賤しく、人に雇われて除糞を業とす。不思議にも仏陀を尊び、尼提ははるかに世尊を見たてまつり、崇敬の心が深かつた。然し、身は臭穢にして、背に糞器を負えるをいやしみ、世尊の御目に入るのもおそれて、いつも道を避け、身を隠して、ひそかに合掌していた。

釈尊はこの尼提をあわれみ給うて、彼に近づかれると、避けて隠れ去ろうとした。仏はそれを捨てたまわざ、彼の行く方に現れられた。彼は、わが薄福の身を愧じて、急いで廻避しようとして、糞器が壁にあたつて破れ、糞汁が流れてあたりを汚し、土下座して仏に謝しまいらすと、尼提に呼びかけられて、仏弟子に加え給つて、直きくのお導きをうけて、心垢は洗除され、尊者と尊ばれる身と転じたのである。この時釈尊は偈を説かれ

わが法の益を得んとせば、唯とく出家すべし
甘露を得るは智慧による、いかでか種姓によらん
貴きもまた賤しきも、身は共にこれ四大空なり
種姓はかりのけじめなり、智慧なくば何かせん
と。

難陀の帰仏

釈尊は、御生國のカビラ城下に托鉢せられた時、城主と

なり新婚の夢に酔うた難陀が、供養物を持って仏に捧げようとした。世尊は、時いたれりと見抜かれて、難陀を精舎に迎え入れたまうた。

難陀は、愛妃のソンダリーを憶いつめて道を求めようとしなかつた。そこで、比丘達が托鉢に出た隙間に、精舎を抜け出そうとしたが種々の障りが出来てそれも出来なかつた。世尊は、これを見られて、彼を連れて山中に入り給うて、そこに遊ぶ雌の猿公を指示されて、汝のソンダリーとかの中から、一人の天女を指し、誰れを待つやを聞け、と仰ると、その天女は、仏弟子に難陀という人が居られるが、やがて天界に生れて来られるのでお待ち申しています、とのことであつた。難陀は、美しい天女に魅せられて、ソンダリーを忘れて、仏の教をよく守るよつになつた。然し、仏弟子達は、彼の志願の天界の樂を求めるだけで、眞実のさとりの境、成仏の道から逸れているのを知つて、話しかける人もなく、彼は孤独であつた。

世尊は、更に難陀を伴なわせて、地獄の世界を訪れ給うた。そこに大きな釜に熱湯がたぎつてゐるが、そこに誰も

居ないのを指さされて、彼の鬼共にその故を問えと難陀に命じられた。彼がその由をきくと、仏弟子の難陀が、天国に生れるけれど、ほどなくここに落ちてくるので、その準備をしている、とのことであつた。

この時、難陀は、始めて、愛欲のはては、この地獄の釜であつたかと夢がさめて、仏道に帰する身となつた。得道

後の難陀は、愛欲に苦しむ人達のために、仏心のまことを説いて、大きな感化を与えるよつになつた。

黑白二鼠の譬

或時、仏弟子のビンツル尊者が、彼の國の優陀延王に説かれたもので、広く世に伝えられたものである。ロシヤの文豪トルストイはこれを聞いて非常な感銘をうけたと云われる。

「一人の青年があつた。東方から毎日美しい太陽ののぼるのを見て、東方には理想の國があると思いこみ、街をすてて東へ、東へと旅して行つた。然し行けども／＼太陽は従前のままに遠いのに疲れて、後方を省みた。驚いたことはそこの大きな象が砂煙を立てて迫つてゐる。

恐れて、東方に走り続けたが、象の足は早い。そこであたりを見ると、一つの古井戸があり、樹の根が垂れさがつてゐた。早速それをつたつて、身を井戸の中に隠くし、ホツとして、底を見ると龍が口を開けて落ちてくるのを待つ

ている。四辺には夫々に毒蛇が鎌首をあげて、今にもとびかかろうとしている。耳をすますと、樹の根を白と黒の鼠がかじる音である。また、空を野火が焼ける煙が覆うている。さらに、樹根をつたつておりる時、そこにあつた蜂の巣をゆさぶつたので、沢山の蜂が手となく足となく刺し続けた。

绝望して、空を仰いでいると、一日に五滴、蜂蜜がおちて口をうるおし、その甘味なのに、種々の苦難をしばし忘れて、その五滴の蜜のみを持つてゐる。」

この譬は、若き日、青春の希望に燃えて人生の門出をするが、無常の象に追われ、わずかに生命の樹根をたよりにしているが、日夜にかじりへらされているし、死の龍、病の毒蛇は今にも身をそこねようとしている。蜂とは邪念であり、野火は老病。五滴の蜜とは、五欲（食欲・色欲・睡眠欲・名欲・財欲）である。これらは仏の智見において明らかに知らされるところで、その救いのない身故に仏の大悲やむにやまれず、本願の手をさしのべて下さるのである

あとがき

師走になりました。例年のようにこの月は思出の多いことあります。先ず釈尊が菩提樹下で大覚を得られ、爾来二千六百年、人々に大きな灯火となり畢竟の依所となつて下さいました。又、近角常觀先生の祥月、日本が全面戦争に突入しようとした直前に、前途を憂いて下さると共に、法灯の不滅を御病床にあられて掲げ続けて下さいました。

ここに、近角先生の宗教最高の理想の稿を転載させていただきました。我々が或は現世のみに執着し、或は未來の夢に惑惑されて足下を省みぬ者、更に老いて過去のみを語り世に取りのこされるといった迷いの世界から、大覚の光明界の成就を明示して下さいました。そこに不滅の生命と不斷の活動が存するのであります。御精説を願います。

福島先生の晩年の聖人を偲ばれた頃をいただきました。沢山の人々に慕い寄られた関東二十年の生活を閉じ、三十年の御晩年の京洛の御身辺と御心事は、聖人を仰ぐ者の誰もがうかがいたいところであります。

井上様は、如來の御思惟とその不思議な御

働き一つで信心をたまわることを明示して下

さり、煩惱に縛縛され、相対分別の自力のはからいの空しさを教えられました。

西元様の白道の旅日記に、木村無相さんの近況とその快悦を伝えて下さり、なお長い年月、知りたいと願われた、『救われぬ身にしみわたるみ名の声』の一句をのこして大陸で戦死された無名戦士の実名を探し出された喜びを記して下さいました。

木村さんの念佛詩、香樹院師にお会い申して、私共が直々お慈育を蒙ることの出来る、感銘の深いものであります。なお、京都の文昌堂から、木村さんの念佛詩抄の第六版を重ねて出して下さる由であります。いよいよ寒波が続きますので、お大切にと祈念しております。

十二月八日の成道会をお迎え申すにつけ、釈尊に直き直きに導かれた人々の、私の心に深く感銘をうけ、いつも思出されます方々のことを略述いたしました。

然し同じ富士山も見る人の心によつて色々に映つてきますように、私共には大聖の御徳を存分に讀えることは不可能であります、唯念佛裡に洪恩を謝すばかりであります。

御案内

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会。一道会館の南隣り、

南区駄上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後

市バス、御器所通り又は北山下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く) 尾西市三条板倉名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

地下鉄、御器所通り下車。

定価半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄
名古屋市南区駄上町二ノ八八

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
發行所 慈光社

郵便番号 四五七